

九州大学

大学文書館ニュース

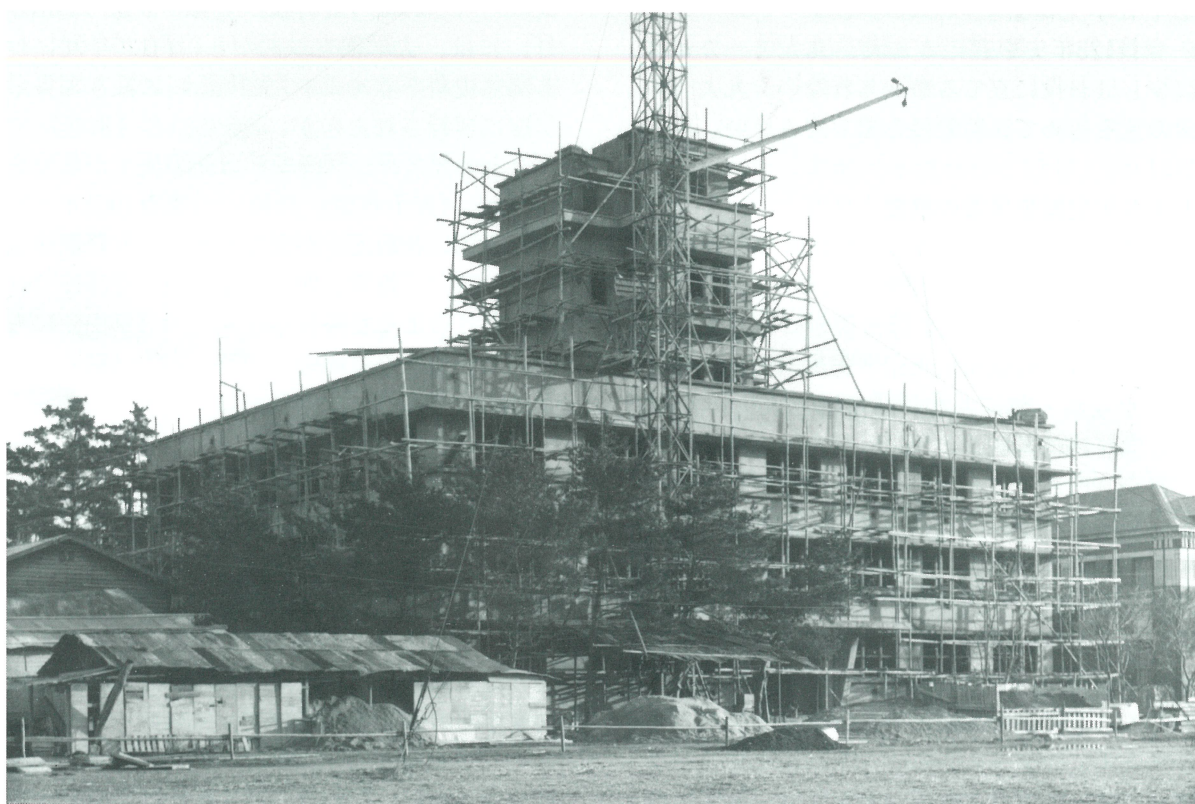
第43号

2020. 3. 31

目 次

九州大学七十五年史編集室のこと…………… 2	九州大学大学文書館委員会名簿…………… 9
『九州大学百年史』（私的）編集後記…………… 6	九州大学大学文書館名簿…………… 9

九州大学大学文書館委員会名簿…………… 9
九州大学大学文書館名簿…………… 9
大学文書館日誌抄録…………… 9



「九州帝国大学工学部航空学教室工事写真」（1939年）

1938（昭和13）年4月、九州帝国大学工学部に航空学科が設置された。東京帝国大学に次ぐ、わが国では二番目の航空学科であった。写真は、その航空学教室建築工事写真である。場所は工学部グラウンドの東側で、1939（昭和14）年3月に竣工した。竣工当時は白亜の建物であったが、1945（昭和20）年初頭、全学的になされた空襲避けの迷彩塗布によって真っ黒にされた。戦後の1946（昭和21）年1月、航空学科が廃止され工業力学科、応用力学科となったことにともない、同学科教室の建物となった。1956（昭和31）年4月、航空学科は航空工学科として復活したが、迷彩は塗り直されることなく、2019（平成31）年1月の建物解体まで続く。なお、本写真は、九大七十五年史編集の際に収集された施設部ガラス乾板（35枚）の中の一枚である。編集終了後、施設部の求めに応じて返却したが、いつのころか乾板（35枚）は廃棄され、いまでは大学文書館に焼き付けた一枚が残るだけとなっている。

九州大学七十五年史編集室のこと —退職にあたっての回想—

折 田 悦 郎

はじめに

1985年5月1日、九州大学文学部長室で「文部教官教育職四等級（九州大学助手文学部）に採用する」との辞令をいただいた。勤務場所は、九州大学（以下、九大）七十五年史編集室である。同編集室は、以後、史料室、大学史料室、大学文書館と名称を変え、九大での大学史・文書館学研究に貢献する。私は、これらの組織に35年間在籍し、アーカイヴズ活動、研究・教育活動に従事することができた。そして、今年の3月には九大を定年退職となる。この間の経緯、特に基礎となった七十五年史編集室の経験を記録しておくことは、今後125年史を迎える九大、九大アーカイヴズに少しはお役に立てるかもしれない。九大への感謝の意を込めて、回顧録を記してみたい。

七十五年史編集事業の概要

1986年5月、九大は創立七十五周年を迎え、これを記念する『九州大学七十五年史』（以下、『七十五年史』）の編集を行うことになった。当時、九大には私の恩師川添昭二先生（元九大名誉教授）が編集・執筆された『九州大学五十年史』（全3巻、1967年11月。以下、『五十年史』）があったが、それ以降の年史編集が計画されたのである。創立七十五周年記念事業は、1984年6月の部局長会議で基本方針が検討され、①1986年5月の創立記念日に記念式典を開催する、②『五十年史』に継ぐ25年間（1961年～1986年）の年史（通史編）を編集する、③編集期間は3年とする、という基本事項が決定されていた。編集体制は、まず評議会内に設置された創立七十五周年記念事業委員会のもとに編集委員会がつくられ、さらに同編集委員会のもとに七十五年史編集室が組織されるというものであった。1985年3月、第1回編集委員会が開かれ、同年5月1日には七十五年史編集室が開設されて、専任の教官（講師1、助手1）が着任した。専任講師には九大文学部附属文化史研究施設の柴多一雄助手が、助手には大学院文学研究科博士後期課程の私が任じられた。

1985年5月の編集室設置以後は、上に述べた基本方針にそって編集がなされる予定であったが、

実際には翌年5月の七十五周年記念式典にあわせて、急遽『写真集』を作成することが決められ、同じく大学創立以来の『史料編』も編集することになった。『史料編』は『七十五年史』である以上、近年の25年間に限定するのは不自然であるとの編集委員会の議論を受けてのものであった。ただし、『通史編』は最初の計画どおりに、特に大学「紛争」期を中心に編集することとなった。九大史における「紛争」の意義を当初から認められていた田中学長・川添学生部長の見識と編集委員会委員の先生方の対応は、立派だったと思う。次に刊行された『史料編』上巻・下巻（1989年5月）には、大学創立以前からの約120年間にわたる関係史料を収めた。『史料編』に続き編集最終年度に刊行されたのが、『通史』と『別巻』である（1992年3月）。『通史』は柴多先生が執筆をされたが、『五十年史』以後、つまり1961年～1986年の叙述に8割近くが充てられ、高度経済成長期以降、特に「紛争」期の九大について詳述されている。このような著作は他大学の『年史』にも未だ現れていない。同時に刊行された『別巻』の編集は私の担当で、講座変遷表や人事・法令一覧、各種統計、年表等を収めた。

七十五年史の編集—議事録の撮影—

七十五年史編集室での最初の仕事は、『五十年史』を読むことであった。恩師川添先生は『五十年史』をご自分の「主著」と仰っておられたが、なるほど大変に面白かった。九大史の流れを大体理解すると、今度は当初の予定にはなかった、前述の『写真集 九州大学史 1911～1986』の編集作業であった。これは当時の田中健蔵学長が、翌年の七十五周年記念式典にあわせて（参列者に配布等すべく）編集を指示されたものである。この『写真集』については、「編集後記」に編集委員長が「編集実務担当者である柴多・折田両君に、感覚的に九州大学の誕生と成長とを（中略）、知っておいてもらいたかったからである」と書かれて、学内外で物議を醸したが、確かにビジュアルに九大史をとらえる訓練にはなり、後年の『九州大学百年史写真集』（2011年）の編集には大い

に役立った。

『写真集』編集の次は、各部局（学部等）の教授会議事録の撮影であった。文学部から始め、同学部については1986年6月13日～25日の間に撮影を行っている。「ヒラカワ」のマイクロカメラで、基本的には助手の私が撮影した。強烈なライト下での作業は、特に真夏の場合は重労働で、頭の中は真っ白、ギックリ腰にもなったが、結果的には議事録を通覧することになり、九大史の大きな流れを実際の史料で確認することができた。全部局の撮影には丸々2年を要した。最も基本的な史料である評議会議事録の撮影は最後の方になったのだが、これは某学部の某教官から学部「自治」を盾にした強い反対が出され、大学の公的事業である編集作業・撮影への「許可」が出なかったからである。しかし現在では、この評議会議事録は大学文書館に移管され、最重要資料の「特定歴史公文書等」として市民に公開されている。

七十五年史の編集―聞き取り調査―

七十五年史編集室では、柴多先生が中心となって元総長等、九大関係者（合計20名）への聞き取り調査も行った。ヒアリングの対象者は各時代の九大執行部で、実に多くの貴重な証言を得ることができた。話者の多くは、後輩・教え子を戦場に送り出した戦争体験の持ち主であり、経験豊かな一流の大学人（教育者・研究者・事務官）であった。どの方からもあとから「紛争」への対応・処理の善悪を軽々には云々できないほど、真剣かつ温かく接していただいた。以下の方々である。

1987年 2月13日	*北川敏男名誉教授
2月17日	*高田勝名誉教授
2月25日	*原俊之名誉教授
2月26日	*問田直幹名誉教授
3月4日	*谷口鉄雄名誉教授
3月11日	*水野高明名誉教授
3月12日	桑原万寿太郎名誉教授
3月25日	*池田數好名誉教授
3月26日	神田慶也名誉教授
10月22日	+乾侑長岡技術科学大学教授 (元庶務課長)
10月28日	入江英雄名誉教授
11月13日	井上正治名誉教授
11月17日	田中健蔵名誉教授
1988年 2月29日	+奥田八二名誉教授
1989年 2月9日	田口胤三名誉教授



九州大学創立75周年記念写真展会場

2月15日	清山哲郎名誉教授
2月16日	中楯興名誉教授
10月26日	小林靖之元学生課長
11月31日	中溝慶生名誉教授
1990年 2月7日	竹下健次郎名誉教授

記録はテープレコーダーで行ったが、ヒアリング調査の後半になるとテープを止めてから重要な情報を提供してくれる方が多いことに気が付き、テープを録らずにメモだけを取ることもあった（たとえば井上正治名誉教授、奥田八二名誉教授の場合）。そのようなテープや筆記録のうち、九大「紛争」関係者、7名の方々（前記リストに*を付した人）については、後年、私の科学研究費補助金の報告書『聞き取り「九大紛争」―教官・学生の証言―』（2015年3月）で、また+印を付した2名の方については、すぐ後でふれる拙稿で復刻・刊行した。これらのヒアリングのなかでは、徹頭徹尾、いわゆる米軍機引き降ろし事件（『七十五年史』359頁～361頁を参照）への関与を否定された水野高明総長の「対応」と、大学自治について確固たる意見、「紛争」の意味を語られた井上正治名誉教授の話が興味深かった。米軍機引き降ろし事件に関しては、最近の「九大学生運動史研究と二、三の問題―「総長先頭デモ」・米軍機引き降ろし事件―」（『あの日 あの時 この時代―ファントム墜落五十周年・さよなら九州大学箱崎キャンパス―』、花書院、2018年8月）で、私なりの見解を示したが（引き降ろしは、当然ながら水野総長了解のもとに実行された）、井上氏については、同氏が内ゲバ事件に遭われた後のヒアリングだったので（於東京井上法律事務所）、事務所に入るのに結構待たされた記憶がある。また、直接「紛争」に関係はしないが、上記お二人のほかでは、七十五年史時代最後の学長、田中健

蔵学長の「大学紛争を記録するのは非常に大切な仕事だ」「九大史で博士論文を書くつもりで頑張るなさい」「百周年のときには九大はないかもしれない」といった話が強く印象に残っている。そのときには「この人は何を言っているのか」と思ったが、博士論文は大学文書館関係者2名が九大史で学位を取得し、もう一つの九大についても評議会・教授会が最高議決機関であった大学は確かになくなり、メインキャンパスの箱崎・六本松キャンパスもすでにない。

因みに、この七十五年史時代のヒアリング調査のおかげで、私は当時鬼籍に入られていた武谷健二学長以外の歴代総長・学長・各代行（結果的には水野総長から現在の久保千春総長まで）、合計14名の先生方の訾訾に接することができた。また、1986年3月、編集委員の有馬学（現名誉教授）・植田信廣（同）先生に同行して、風早八十二氏（元九州帝大法文学部教授）と黒木三郎氏（元早稲田大学名誉教授）への聞き取りを行ったことも大切な経験となった。風早先生は昭和初期の九大法文学部法科内訌事件（1927年、『五十年史』271頁～275頁を参照）の当事者で、戦中期には思想問題で下獄されており、黒木先生は、1943年10月、九大からの学徒出陣壮行会で答辞を述べたご本人であった。ヒアリングの重要性を前もって実感できたのである。

七十五年史の編集—その他のこと—

前項では七十五年史の編集について、その間の経緯と活動を中心に振り返ってみた。ここでその他いくつかの感想も述べておきたいが、まず第一に、具体的な年史編集作業では、最初からコンピューターを最大限に利用できたという点が恵まれていた。編集室設置のころからいわゆるパソコンが普及し始め、結局は常時数台のパソコンとハードディスクを利用することができた。最初の本体はNECのPC-9801VMⅡ。2台を購入した。フロッピーは5インチである。ハードディスクのメーカーは忘れてしまったが、現在の家庭用プリンターぐらいの大きさがあった。パソコンの導入については初代編集委員長が積極的で、多数の学生アルバイトの雇用や、実際の執筆・編集に役立ち、別巻のほとんどはいわゆるフロッピー入稿で印刷された。凸版印刷㈱で印刷したが、この方法は西日本地区では極めて早い事例に属すと聞いた。そしてパソコンで作成したデータはすべて大学史料室・大学文書館・百年史編集室に引き継がれ、いまで

は大学文書館の基礎的な資料となっている。

次に年史の編集や大学史料室の設置に際しては、学内外の多くの人たち・諸機関のお世話になった。学内では本部の庶務課に面倒をみてもらい、実際の編集作業では特に九大文学部国史学研究室、教育学部の学生・院生諸君の献身的な協力を得た。『七十五年史 通史』の最終頁に九大国史学を中心とした学生・院生、合計45名のアルバイト生の名前が列挙されているが、多くのバイト学生を同時に雇用しまとめ上げる柴多先生の技量にはいつも驚かされていた。先年終了した百年史編集室の藤岡健太郎准教授（現大学文書館准教授）も柴多先生同様であったが、これは（私にはない）一つの大きな才能なのだろう。ただ、私にとっても七十五年史時代は、学生アルバイトの事務書類の管理や簡単な経理事務など、後年の大学文書館運営に直接に役立つ仕事を学んだ大切な時期であった。

大学アーカイヴズ設置への準備—『九州大学史料の収集・保存について—九州大学史料室設置の提言—』—

『七十五年史』の刊行が大詰めを迎えた1990年度になると、編集過程で収集された膨大な資料の整理・保存が問題となってきた。そこで七十五年史編集室では、その方法等について検討することにし、ワーキンググループで討議を重ねた結果、1年後の1991年4月に『九州大学史料の収集・保存について—九州大学史料室設置の提言—』（全23頁。以下、『提言』）と題する報告書を作成した。以下に「大目次」を示すと、「はじめに」「Ⅰ. 検討の経過」「Ⅱ. 九州大学七十五年史編集事業の経過と収集史料の現状」「Ⅲ. 大学史料の収集・保存のあり方について」「Ⅳ. 本学における大学史料の収集・保存のあり方について」「Ⅴ. 提言」からなる。有馬学文学部教授（後に第2代大学史料室長・現名誉教授）が中心となって取りまとめたもので、その内容は年史編集の経過を振り返り、大学史料室・大学アーカイヴズ（文書館）にはどういうものがあり、またどうあるべきかといった観点から「提言」を行ったものである。そして本来のあり方からすれば大学アーカイヴズ（文書館）が最も望ましいが、現状では困難と予想されることから、以下の条件を満たす大学史料室の設置を要求する、とする。「①独立の機関であること。②史料の収集・保存に関する専任のアーキビストを配置すること。③史料の収

集・整理・保存・研究を行うのに十分な場所を確保すること。④史料室の管理・運営および史料室の研究活動を管掌する常設の委員会を設置すること。⑤史料の収集は、単に年史刊行のみを目的とするのではなく、九州大学に関する史料を恒常的に収集・整理することを目的とし、その活動を保証すること。具体的には学内諸文書の廃棄等の情報が史料室に提供され、収集・保存を容易ならしめるようなシステムをつくること」、このような結論が述べられている。

『提言』は1991年に作成されたので、後年のいわゆる情報公開法等には当然ふれ得ていない。しかし、九大大学史料室ができるときの最も基本的な「文書」であり、後には寺崎昌男・別府昭郎・中野実編『大学史をつくる—沿革史編纂必携』（東信堂、1999年6月）に、「IV. 本学における大学史料の収集・保存のあり方について」と「V. 提言」の部分が収録されたほか、2000年11月に発足した京都大学大学文書館の設置にも参照された。この『提言』の国立大学アーカイブズ史上に占める重要性については、加藤諭氏（東北大学史料館准教授）の最近の著書、『大学アーカイブズの成立と展開—公文書管理と国立大学—』（吉川弘文館、2019年12月）でも指摘されている。この『提言』は最終的には1991年7月、七十五周年記念事業委員会委員長から、当時の高橋良平学長に「大学史料室設置要望書」として提出され、翌年1月の評議会で「九州大学史料収集・保存に関する委員会」の設置が決定された。こうして1992年4月、七十五年史編集室が九州大学史料室に改組、設置されたのである（この史料室が1992年12月、大学史料室に、大学史料室が2005年4月、大学文書館に改組されて現在に至っている）。

大学アーカイブズ設置への準備—「将来における本学年史発刊編集のための諸資料収集保存方法について」—

有馬先生の記述にもあるように（有馬学『わが報告書・研究と教育 短い旅の途中で』、19頁、2009年3月）、上記の『提言』には下敷きとなる「文書」があった。川添先生が1967年12月19日にまとめられた「将来における本学年史発刊編集のための諸資料収集保存方法について」が、それである。この「文書」を大学文書館に所蔵する「五十年史関係資料」の中から見つけ出したときは驚いた。『提言』は『大学史をつくる』等で読

むことができるが、川添私案については未だ活字化されたことがない。やや長くなるが以下に引用しておく。時代が異なっても一流の研究者・実務者同士が書かれたものは大きな化学変化を引き起こすのだということ、それからこれらの川添私案と『提言』が、以後の大学文書館設置の際に作成される「要望書」等の源流となり、九大大学文書館に底流しているということ、この2点をご理解いただければ幸いである。

将来における本学年史発刊編集のための諸資料収集保存方法について

1. 公文書 本学における公文書類については、「九州大学文書処理等規則」第三章第六節文書の保管の各条項に依拠し、また各部局における公文書類については、各部局「文書処理等規則」中文書の保管の条項に依拠して、文書の保管年限を経過し、また他の事由により文書を廃棄する場合には、関係者に立ち合わせ年史編集に必要と判定された文書を保存することとする。なお、この規定は評議会において決定し、各「文書処理等規則」に追加すること。
2. 公文書に準ずる私文書 正式な公文書をもって連絡・通知・命令等に至る以前に関係者が私信をもって協議・打ち合わせを行なった場合これらの処理は1、に準ずるものとする。
3. 本学関係者の日記・メモ・蔵書類は、寄贈・購入・複写等の方法をもって保存する。
4. 新聞・雑誌において本学に関係ある記事掲載の場合は、これを切り抜きにするか、複製にして保存する。
5. 本学に関係ある評論・随筆・小説等の単行本が発刊された場合は、寄贈もしくは購入等の方法をもって、保存する。
6. 本学内で刊行された新聞、雑誌、パンフレット、ピラ等々はすべて収集・保存するものとする。収集にあたっては、各関係所管の協力により寄贈を原則とする。
7. 建築物については、取り壊す以前に写真撮影し、新築の場合は竣工に至る過程を写真撮影しておくこと。
8. 本学関係者の論著は寄贈・購入・複製等の方法をもって遺漏なく完備すること。
9. 収集、保存には、専任者および保存室をおき、整理を行なわせ、必要計費を計上すること。所属は学長直属とし、他の機関の制約を受けないようにすること。



75年史編集室にて（1986年3月）

10. 全学的に本学史に対する関心を恒常的に保たせ、これへの協力、助言、指導を行なうこと。

〔1967年12月19日〕

1の公文書・文書処理等規則・評議会との関係への言及、3と6の私文書やビラ等への留意、9の「室」の設置や「所属は学長直属とし、他の機関の制約を受けないようにすること」など、現在に通じる先見性には注目すべきものがある。

むすびにかえて—お礼の言葉—

七十五年史編集室を中心に、九大のアーカイヴズについて私的回想を綴ってきた。本文冒頭でも述べたように、七十五年史編集室はその後、史料室、大学史料室、大学文書館と改組されて現在に至るが、九大での大学史研究・アーカイヴズ活動と、それらの設置に与えた影響には誠に大きなものがある。このような活動の中、事務処理など、実際の運営面では大学本部庶務課（現総務課）や文学部を始めとする各部局事務部に多大なご支援をいただいた。また、編集室以降

のアーカイヴズ時代には、歴代総長・大学史料室長・大学文書館長の先生方に色々のご教示を賜った。

私は1973年の入学以来、大学を一度も離れることなく、47年間の長きにわたって九大で教育を受け、研究生活を開始、働く「場」を提供していただいた。改めて深謝申し上げたい。

皆さん誠に有り難うございました。九大の益々のご発展を祈念し、搁筆いたします。

（九州大学大学文書館教授）

『九州大学百年史』（私的）編集後記

藤岡健太郎

2009年度より実質的な編集作業が始まった『九州大学百年史』（以下『百年史』）は、2017年に全巻の公開を完了した。本稿は諸事情により掲載できなかった「編集後記」を、編集に携わった者として私的に書いてみたものである。もとより私的なものであるから、その内容は九州大学および九州大学百年史編集委員会としての見解ではないことをお断りしておく。

2011年に創立百周年を迎える九州大学では、これを記念してさまざまな事業を行うこととし、その1つとして『百年史』が編纂されることとなった。

『百年史』編纂に関しては、有川節夫理事・副学長を委員長とする百年史編集ワーキンググループ（以下「百年史WG」）が設置され、2006年10月4日にその第1回が開かれた。ここでは通史3巻・

部局史4巻・資料編3巻・写真集1巻の全11巻構成とすることが決められた。その編集期間については、年史編纂の経験をもつ委員は少なくとも10年とすることを主張したが、理系部局の委員などから長すぎるとの意見が出て、有川委員長の判断によりひとまず8年間とすることとなった。また、有川委員長の意見により、WEB上で編集作業を行い、公開もWEB上ですることなどが決定された。

翌2007年6月4日の第2回百年史WGでは、百年史編集委員会（委員長新谷恭明大学院人間環境学研究院（のち基幹教育院）教授、2016年4月1日熊野直樹大学院法学研究院教授に交替）を設置すること、百年史編集室を大学文書館に設置し、その専任教員（准教授・助教各1）を全学運用定員で配置するよう要望することとした。

百年史編集委員会は、各研究院と病院から2名

ずつ、各研究所・（研究院をもたない）学府・附属図書館・情報基盤研究開発センター・健康科学センター・センター群協議会・事務局総務部から1名ずつの委員で構成され、2007年9月3日に第1回が開催された。この場では百年史の構成、百年史編集小委員会の設置、編集室の確保について協議された。以後百年史編集の具体的な進め方等については編集委員会で決定されることとなり、百年史WGは2008年10月に編集委員会の親委員会として史料編纂委員会（委員長丸野俊一理事・副学長）に改組された。

2009年1月1日付で大学文書館内に百年史編集室（以下「編集室」）が設置された。藤岡健太郎准教授と陳昊助教が4月1日より配置され、編集作業が開始された。事務については落合秀俊理事・副学長が担当理事となり、総務部社会連携課（2009年8月1日より百周年記念事業推進課、2013年4月1日より基金事業課）と総務部総務課が担当した。なお、『百年史』編集の予算は、当初は百周年基金事業の寄付金から支出されていたが、2010年度より大学運営経費から支出されることとなった。

編集室はまず、評議会・教授会等の議事録撮影や新聞・大学刊行物の記事目録作成等の資料収集作業のほか、WEB上で編集作業を行うためのシステム構築を行った。WEB編集システムについてはオリジナルのものを構築することも考慮されたが、費用の面などから、最終的には既存のグループウェアを使用することとした。

通史編については、『九州大学七十五年史』では創立50周年までは『九州大学五十年史』の要約であったが、『百年史』では、創立75周年までの時期に関しても、近年新たな資料が出てきていることなどから、創立前史から新稿として執筆することとした。まず通史編Ⅰについて、編集室藤岡准教授と井上美香子助教（2011年4月1日陳助教から交替）がそれぞれ全体の3分の1程度ずつを執筆することとし、残りの3分の1程度が編集小委員会委員を中心とした教員に委嘱された。

部局史編については基本的に部局の責任とし、各部局で部局史編集組織を設置するなどして編集作業を進めることとした。部局史編に関して編集室は、主に各部局に対する助言や資料提供など、編集作業を支援する役割を担った。

資料編については当初3巻構成とし、うち2巻は法令や文書資料、新聞記事等を、1巻は一覧・統計・年表等を掲載することとし、『七十五年史』史料編掲載資料の一部は掲載しないこととしてい

た。しかし、第8回百年史編集小委員会（2012年6月12日）で、『七十五年史』史料編掲載資料も『百年史』ですべて掲載すべきとの意見が出て、3巻ではそれが不可能であるため、1巻増やして4巻とすることとなった。

写真集については、『九州大学七十五年史』写真集を編纂した折田悦郎編集副委員長（大学文書館教授）を中心として編集作業を行うこととした。

こうして編集作業が開始され、2011年にまず『九州大学百年史写真集』を印刷物として刊行し、記念品として創立百周年記念事業への寄付者に配布されたほか、九州大学生生活協同組合を通じて販売も行った。

しかし、その後の編集作業は難航した。その第一の要因は部局史編の原稿提出の遅れである。提出締切を守った部局はごく僅かで、大半の部局が締切を大幅に過ぎてから提出するような状態であった。これは一つには編集室からの働きかけが不足していたことが要因であるが、部局史編集のための部局の組織が設置されなかったり、設置されても十分に機能しなかったりしたことも要因であった。また、とくに小規模部局では、事務担当者の交替の際に引継ぎが行われておらず、部局史編集自体が忘れられてしまっているようなことも起きていた。こうした事態に対し、各巻掲載部局の原稿がすべて揃ってから公開するのではなく、部局数・予定頁数の半数以上の公開用ファイルが用意できた段階で公開を開始することとするなどの対応を行った。

編集作業難航の第二の要因は、資料編の編集作業が容易ではなかったことである。資料編Ⅰについては大きな遅延はなかったが、Ⅱ・Ⅲ・Ⅳの公開は予定よりも遅れることとなった。その原因は入力や校正が予想以上に難航したことにある。Ⅲについては図表の多さが組版の大きなネックとなり、Ⅳについてはとくに近年のデータが複雑な上に事務方が過去のデータを把握できていない場合も多く、確認作業に多大な時間を要することとなった。

このような難題を抱えながら編集室では准教授・助教が通史編の執筆も行わねばならなかった。また、通史編執筆者の大半は原稿提出が遅れ、全体の作業遅延に拍車をかけることとなった。さらに編集室のさまざまな不手際が作業遅延の要因となったことも否めないところである。

このように編集作業が難航した結果、現状では8年間での全巻公開が不可能であることが、2014年の半ばまでには明らかとなった。そのため編集

室の体制の見直しと編集期間の延長を要望することとした。編集期間延長は認められなかったが、2014年10月より『百年史』担当理事となった芝田政之理事（事務局長）の下、編集作業の加速化を図るため編集室を大学文書館から独立させ、担当理事を室長とする推進室とし、あわせて通史編Ⅱ・Ⅲを執筆する助教2名を新たに採用することとなった。推進室化は2015年6月1日に行われ、事務は基金事業課（2016年4月1日より同窓生・基金課）が担当することとなった。また、同年7月1日付で官田光史・市原猛志両助教が採用された。2016年4月1日より担当理事は玉上晃理事（事務局長）となり、原稿・校正未提出部局に対して早急に提出するよう厳命がなされるなど、編集作業のさらなる加速化が図られた。こうして『百年史』編集は最終年度に向けて追い込みがかけられ、年表編を積み残すことにはなったものの、なんとか8年間での完成に漕ぎ着けたのである。

『九州大学百年史』は、大学の年史としては初めて、印刷物ではなくWEB公開を主体としたものである。インターネットに接続できPDFを閲覧できる環境があれば、誰もがいつでもどこでも本書を読むことができる。印刷物にして本棚に並べれば数十cmの幅になるはずだが、電子版であるのでそのようなスペースも必要ない。印刷物なら全巻を持ち歩くことなど不可能であるが、電子版ならUSBメモリにダウンロードすればシャツの胸ポケットに入れて持ち歩くこともできる。パソコンの画面では見づらいということであれば、必要な部分だけ印刷して読むこともできる。また、編集側としては、印刷物はいちど印刷してしまうと修正は容易ではないが、電子版ならば修正することも容易である（もちろん、修正の必要がないに越したことはないが）。あるいは昨今、大学生がコピペ（コピー&ペースト、切り貼り）でレポートを作成してしまうことなどが問題となっているが、出典さえ示せば、コピペして活用してもらうことはむしろ歓迎すべきことであると考えている。『九州大学百年史』のWEB公開にはこうした点で大きなメリットがあり、先駆的な存在となっていくものと自負している。

一方で、反省すべきは十分な編集期間を確保できなかったことである。他大学の百年史のうち巻数が10以上のものは、東大が10巻・12年、東北大が11巻・13年を要しており、そもそも10巻を8年間で完成させるという計画自体に無理があったと言わざるを得ない。そのため、記述すべき内容

の漏れなど、何らかの不備が生じているのではないかという不安を禁じ得ないところである。それでもともかくも8年間で完成することができたのは、多くの方々の協力と、百年史編集室スタッフの献身的な努力があったからにほかならない。また、印刷物ではなくWEB公開としたことも、短い期間での完成に些少ではあるが貢献したと言える。

最後になるが、『百年史』は数多くの方々のご協力・ご尽力なしには完成することができなかったものである。各巻の執筆にあたられた多数の九州大学現・旧教職員のご尽力に感謝申し上げます。また、執筆以外の面でも百年史編集に積極的なご協力をいただいた各部局や事務局の関係者、九州大学学術情報リポジトリでの公開にご協力いただいている附属図書館、そして学内外の資料提供者、編集協力者の皆様方に厚く御礼申し上げます。

（九州大学大学文書館准教授）

第14編 伊都キャンパスへの統合移転と病院地区の再開発

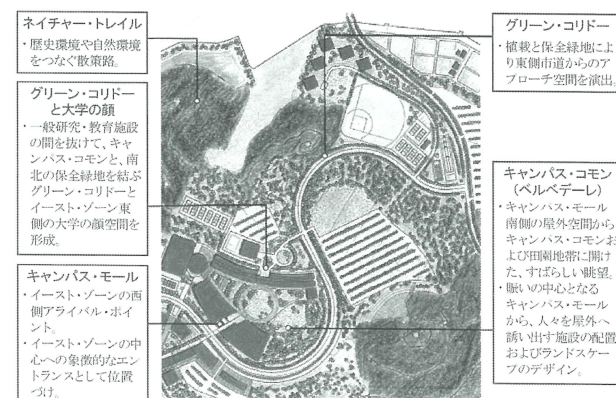


図 10-3-3 空間モデル — オープンスペース計画（イースト・ゾーン）

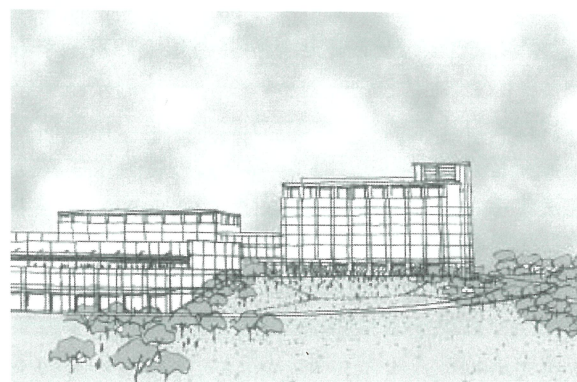


図 10-3-4 南側から見たキャンパス・コモン（ベルベデーレ）のイメージ

九州大学大学文書館委員会名簿

委員長		副学長	宮本 一夫	委員	芸工院	教授	藤原 惠洋
委員	文書館	教授	折田 悦郎	〃	医 院	准教授	梶岡 俊一
〃	〃	准教授	藤岡健太郎	〃	比文院	准教授	伊藤 幸司
〃	人文院	教授	佐伯 弘次	〃	総 院	教授	渡辺 幸信
〃	比文院	教授	中野 等	〃	生物環境	教授	吉田 敏
〃	法 院	教授	熊野 直樹	〃	博物館	館 長	緒方 一夫
〃	博物館	准教授	三島美佐子	〃	総務部	部 長	清廣 哲之
〃	韓 七	教授	永島 広紀	〃	理学部等	事務長	師富 洋
〃	情基七	教授	廣川佐千男	〃	図書館	事務部長	瓜生 照久
〃	総務部総務課	課 長	春田 諒				(2020年1月1日現在)
〃	人環院	教授	蜷川 利彦				

九州大学大学文書館名簿

館 長		副学長	宮本 一夫	協力研究員	東京大学教養学部准教授	山口 輝臣
副館長	文書館	教授	折田 悦郎	〃	医学歴史館学芸員	赤司 友徳
専任教員	〃	准教授	藤岡健太郎	〃	北九州市総務局総務部総務課	市原 猛志
兼任教員	人文院	教授	佐伯 弘次	〃	清水建設株式会社 技術研究所	松本 隆史
〃	比文院	教授	中野 等	総務課長		春田 諒
〃	法 院	教授	熊野 直樹	事務職員		江藤まゆみ
〃	情基七	教授	廣川佐千男	事務補佐員		川畑 由美
〃	博物館	准教授	三島美佐子	〃		中村 江里
〃	韓 七	教授	永島 広紀	〃		大谷 莊平
協力研究員	九州大学名誉教授	東定 宣昌		〃		江頭 実生
〃	九州大学名誉教授	植田 信廣		〃		梶嶋 佑太
〃	長崎大学名誉教授	柴多 一雄		〃		諸岡 静児
〃	九州大学名誉教授	柴田 篤		〃		瓜生 敏子
〃	福岡市博物館館長	有馬 學		〃		安藤 久雄
〃	西日本新聞社	大西 直人				(2020年1月1日現在)
〃	西南女学院大学教授	新谷 恭明				

大学文書館日誌抄録 (2019年2月～2020年1月)

2.11 (月)	九州大学箱崎キャンパス閉校企画「ありがとう箱崎」展開催（於箱崎キャンパス）。	日、19日、26日、30日、9月5日、6日、18日、19日、25日、10月3日、9日、25日、28日、11月7日、13日、12月3日、5日、23日も同様）。
2.12 (火)	大学院人文科学研究院名誉教授、資料調査のため来館（2月12日、27日、3月4日、7日、11日、18日、4月2日、4日、16日、23日、25日、5月8日、13日、30日、6月6日、11日、28日、7月2日、4日、8日、16日、18日、30日、8月1日、5	2.18 (月) 元九大生協職員、資料調査のため来館（2月22日、25日、27日、3月1日、4日、11日、12日、18日～20日、4月1日、3日、8日、9日、15日～17日、22日、23日、25日、5

- 月7日、9日、14日、21日、23日、28日、30日、6月6日、11日、13日、18日、20日、7月2日、4日、5日、9日、16日、18日、19日、22日、23日、25日、29日、31日、8月1日、5日、7日～9日、16日、20日～22日、26日～30日、9月2日、3日、5日、6日、9日、10日、17日～20日、10月1日、2日、4日、7日、8日、10日、11日、15日～17日、21日、23日、28日、29日、11月27日、12月6日、12日、13日、23日～25日、2020年1月6日～9日、10日、14日～17日も同様)。
- 元福岡工業大学教員、資料調査のため来館(3月4日、12日、19日、20日、4月1日、3日、8日、9日、15日、16日、23日、25日、5月7日、9日、14日、21日、23日、28日、30日、6月4日、6日、11日、13日、18日、25日、7月2日、4日、9日、11日、16日、23日、30日、8月6日、20日、27日、9月3日、10日、17日、24日、10月1日、8日、15日、21日、29日、11月15日、29日、12月6日、24日、2020年1月7日も同様)。
- 文学部卒業生、資料調査のため来館(3月8日、15日、28日、29日、4月11日、6月6日、14日、18日、20日、27日、7月2日、4日、5日、9日、11日、12日、16日、18日、26日、30日、8月1日、2日、8日、9日、16日、19日、27日、9月3日、5日、6日、10日、12日、17日～19日、20日、24日、27日、10月1日、3日、4日、8日、10日、17日、18日、21日、24日、29日、31日、11月5日、8日、12日、15日、19日、22日、26日、29日、12月9日、12日、13日、23日、24日、27日、2020年1月7日、9日、16日も同様)。
- 2.22 (金) お茶の水女子大学准教授、資料調査のため来館。
- 3.1 (金) 比較社会文化研究院吉岡斉教授の御遺族より資料寄贈。
- 3.7 (木) 国際日本文化研究センター特任助教
- 授、関西大学博士研究員、資料調査のため来館。
- 西日本新聞社記者、資料調査のため来館(3月8日も同様)。
- 中島郁子氏より資料寄贈。
- 3.12 (火) 北海道大学助教、資料調査のため来館(13日も同様)。
- 3.14 (木) 総合研究博物館から、資料移管。
- 3.15 (金) 元下関市立大学学長、大学文書館視察のため来館。
- 3.25 (月) 呉市文化スポーツ部文化振興課市史編さんグループより資料調査のため来館。
- 3.29 (金) 総合研究博物館に旧工学部本館図面貸出し。
- 3.31 (日) 『九州大学大学史料叢書』第25輯刊行。
『九州大学大学文書館ニュース』第42号刊行。
- 4.1 (月) 大谷莊平氏、事務補佐員就任。
- 4.2 (火) 台湾師範大学教授、資料調査のため来館。
- 4.10 (水) 折田悦郎教授、九州大学新採用職員研修の一環として「九大の歴史にふれる」を講義(於伊都キャンパス)。
- 4.11 (木) 塩川郁夫氏(元医学部附属病院技官)来館、資料寄贈(5月7日、12月4日も同様)。
- 4.12 (金) 下田守下関市立大学名誉教授より資料寄贈。
二宮孝富大分大学名誉教授より資料寄贈。
- 4.17 (水) 毎日新聞より電話取材(学生運動の件)。
- 4.18 (木) 西日本新聞より電話取材(学生運動の件)。
- 4.19 (金) 清水建設株式会社より大学文書視察のため来館(8月6日も同様)。
- 4.25 (木) 大学文書館委員会開催。
- 4.26 (金) 西日本新聞社記者、取材のため来館(九大学生運動の件)。
- 5.8 (水) 医学部第三内科より資料寄贈。
- 5.9 (木) 旧工学部採鉱学科同窓生一行、大学文書館見学のため来館。
読売新聞社記者、取材のため来館(アインシュタイン来学の件)。
- 5.13 (月) 上尾龍介名誉教授の御遺族より資料

	寄贈。		日、26日も同様)。
5.14 (火)	法務・コンプライアンス係より資料調査のため来館。	6.14 (金)	学務部学務企画課より資料移管。
5.17 (金)	統合新領域学府ライブラリーサイエンス専攻一行、大学文書館見学のため来館。	6.21 (金)	折田教授、新任係長・専門職員級研修の一環として「九州大学の歴史について」を講義(於伊都キャンパス)。
5.18 (土)	2019年度本学開学記念行事の一環として「特別展示会」開催(19、25、26日も同様に開催、於箱崎キャンパス旧工学部本館)。	6.27 (木)	九州大学医療情報研究会開催(於大学文書館、6月28日も同様)。
5.20 (月)	福岡女学院大学専任講師、資料調査のため来館。	6.28 (金)	福岡教育大学教授、資料調査のため来館。
5.21 (火)	医系学部等事務部企画・広報係より資料調査のため来館。	7.1 (月)	立命館大学国際平和ミュージアムより資料調査のため来館。同平和ミュージアムに資料貸出し。
5.22 (水)	施設部施設整備係より資料調査のため来館。		福岡女子大学百年史編纂室より資料調査のため来館(9月17日も同様)。
5.23 (木)	人文科学研究院教授、資料調査のため来館(7月18日、8月1日、2日、9日、11月14日も同様)。	7.4 (木)	吉川幸作氏来館、資料寄贈。
	福岡女学院大学資料室より資料調査のため来館(7月1日も同様)。	7.9 (火)	梶原得三郎氏より資料寄贈。
5.24 (金)	奥田八二名誉教授の御遺族より資料寄贈。	7.12 (金)	西日本新聞社編集委員、資料調査のため来館(7月17日、8月9日、9月18日も同様)。
5.30 (木)	柴田篤名誉教授来館、資料寄贈(8月26日、9月25日も同様)。	7.16 (火)	医学歴史館学芸員、資料調査のため来館(8月16日、21日、9月11日、12日も同様)。
5.31 (金)	木田貴大氏、事務補佐員退任。	7.22 (月)	大学文書館委員会開催(書面回議)。
6.3 (月)	桧嶋佑太氏、事務補佐員就任。	7.29 (月)	統合移転推進部資産活用課より、資料調査のため来館。
6.5 (水)	尾添紘之名誉教授より資料寄贈。	7.30 (火)	下関市立大学教授、資料調査のため来館。
6.6 (木)	令和元年度全国公文書館長会議開催(折田教授、藤岡健太郎准教授出席。於東京都ベルサール九段。7日も同様)。	8.5 (月)	慶應義塾大学教授、資料調査のため来館(6日、7日、8日も同様)。
	医系学術協力課生命倫理係より資料調査のため来館。	8.7 (水)	金田久仁彦氏より資料寄贈。
6.7 (金)	岡部啓子氏来館、資料寄贈。	8.21 (水)	文部科学省大臣官房総務課より大学文書館視察のため来館。
6.10 (月)	学務部学務企画課より資料調査のため来館。	8.30 (金)	総務部環境安全管理課より資料移管。
6.11 (火)	元下関市立大学学長一行、資料調査のため来館(6月13日、18日、25日、7月2日、4日、9日、11日、16日、23日、30日、8月6日、20日、27日、9月3日、10日、17日、24日、10月1日、8日、15日、21日、29日も同様)。		奥田八二日記研究会開催(於大学文書館)。
6.12 (水)	「大学とは何かⅡ」(総合(フロンティア)科目)開講(藤岡准教授)。	9.4 (水)	総務部総務課より資料移管。
6.13 (木)	工学部教務課より資料移管(6月25	9.9 (月)	附属図書館事務部図書館企画課より資料移管。
		9.10 (火)	企画部企画課、監査室、国際部国際課、学務部学務企画課、学務部学生支援課、学務部基幹教育課、総務部地域連携課より資料移管。
		9.13 (金)	横山雄治氏より資料寄贈。
		9.14 (土)	九州大学大学文書館・九州大学総合研究博物館主催鈴木淳×AQAプロ

	プロジェクト「とはすかたりー学び舎の肖像」を開催（10月9日まで、於箱崎キャンパス旧工学部本館1階旧同窓会事務室）。	10.30（水）	人文社会系事務部より資料移管。
9.25（水）	芸術工学部総務課より資料移管。	11.1（金）	江藤まゆみ氏、事務職員就任。
9.27（金）	高曽由子氏より資料寄贈。	11.6（水）	施設部施設整備係より資料調査のため来館。
9.30（月）	木下博貴事務職員、理系図書館に異動。	11.11（月）	大学文書館委員会開催（書面回議）。
10.4（金）	「九州大学の歴史Ⅰ」（総合（フロンティア）科目）開講（折田教授）。	11.13（水）	筑紫地区事務部より資料移管（12月3日も同様）。
10.8（火）	筑紫女学園大学名誉教授、大学文書館視察のため来館。	11.26（火）	清水建設株式会社より資料調査のため来館。
10.9（水）	松本文六氏より資料寄贈。	11.28（木）	医系学部等事務部、病院事務部より資料移管。
10.10（木）	矢田俊文名誉教授より資料寄贈（11月21日、12月25日も同様）。	11.29（金）	九州大学病院別府病院より資料移管。
10.15（火）	理学部総務課より資料移管。 農学部事務部、研究・産学官連携推進部産学官連携推進課、情報システム部企画課、財務部経理課、統合移転推進部資産活用課、カーボンニュートラル・エネルギー国際研究所支援部門より資料移管。 鈴木淳氏来館、資料寄贈。	12.6（金）	「九州大学の歴史Ⅱ」（総合（フロンティア）科目）開講（藤岡准教授）。 東昇京都府立大学准教授より資料寄贈。
10.24（木）	大学文書館委員会開催。工学部等事務部より資料移管。ライブラリーサイエンス専攻主催、大学文書館・ワンビシアークाइブズ共催ワークショップ、「自治体がつくる公文書管理時代—公文書管理の課題を考える—」を開催（於箱崎キャンパス旧工学部本館）。	12.12（木）	付設記録資料館より資料調査のため来館（12月23日も同様）。
10.29（火）	台湾師範大学副学長一行、大学文書館視察のため来館。	12.13（金）	医系学部等事務部より資料移管。
		12.20（金）	学務部学務企画課より資料調査のため来館。
		12.23（月）	東北大学准教授、資料調査のため来館。 市橋秀夫埼玉大学教養学部教授より資料寄贈。
		12.25（水）	早稲田大学教授、資料調査のため来館。
		12.26（木）	理学部教務課より資料調査のため来館。
		1.15（水）	施設部より資料調査のため来館。
		1.16（木）	法務・コンプライアンス課より資料調査のため来館。

九州大学大学文書館ニュース 第43号

発行日 2020年3月31日

編集 九州大学大学文書館
発行

〒812-8581 福岡市東区箱崎 6-10-1

Tel:092-642-2292 Fax:092-642-7646

Kyushu University Archives

印刷 株式会社ミドリ印刷